

新約聖書の奥義 第27回 「奥義としての神の国」の特徴を教える9つのたとえ話 ③

□はじめに（前回までの要旨）

1. 「奥義としての神の国」の特徴を教える9つのたとえ話

イエスは、イスラエルの指導者層から公式にメシアではないと拒否された日、その日のうちに、9つのたとえ話を語った。群衆に対して5つ、その後で弟子たちだけにさらに4つ、合計9つである。この一連のたとえ話は、奥義としての神の国の特徴を教えるためのものである。マタイ13章、マルコ4章、ルカ8章に記されている。

2. 一連のたとえ話を理解する鍵は、一つ目のたとえ話「種まき」にある（マルコ4:13）

3. 9つのたとえ話の第一「種まき」

(1) 奥義としての神の国の時代的特徴は、**福音の種まき**がされることである。

(2) その種まきは、**3つの妨害**を受ける。

- ① 悪魔（サタン）からの妨害
- ② この世からの妨害・・・「困難や迫害」
- ③ 内なる肉（罪の性質）からの妨害・・・「この世の思い煩いと富の誘惑」

(3) その種まきには、**異なる土壌が準備される**。この世（人々、地域、国）が一様に反応するのではなく、ある部分は、他の部分よりも、福音の種まきに対して良く応答する。土壌（応答）の種別は4つある。

- ① 道端
- ② 岩地
- ③ 茨の生えた地
- ④ 良い地

(4) その種まきは、**4つの応答**を受ける。

- ① 第一は不信仰の応答である。このとき、まかれた種をついばんで奪っていく鳥は、悪魔とその配下の悪霊たちである。悪魔は福音の種まきを妨害する。
- ② 第二から第三の応答は、信者ではあるが、実を結ぶことのない信者の応答である。第二はこの世からの妨害、第三は内なる肉（罪の性質）からの妨害を受ける。そのために実を結ぶことのない信者となる。
- ③ 第四の応答は、実を結ぶ信者の応答である。

2. 種まきのたとえ話に続く4つのたとえ話

- (1) まかれた種は自ら育つことのたとえ話・・・蒔かれた福音の種は、内側にエネルギーを持っていて、自ら芽を出し、育つ。
- (2) 毒麦のたとえ話（マタイ 13：24～30）には、4つのポイントがある。
 - ① 1番目と2番目のたとえ話で語られた福音宣教の種まきは、真の種まきである。『これに対抗して、偽の種まきが巧妙に行われる』というのが、毒麦のたとえ話のテーマである。「毒麦」と訳されている原語が指すのは、「ダーネル (darnel)」という種類、種は本物の小麦と外観がそっくりである。種から芽生えた茎や葉もよく似ている。穂をつけて初めて、穂の姿で見分けられる。偽の種まきは、巧妙に「福音」らしく装い、良いものに見えるというのが、ポイントである。
 - ② 二つのタイプの種まきがされた結果、良い麦も、毒麦も、同じ畑の中で、隣り合わせて成長していく。
 - ③ 「奥義としての神の国」の時代の終わりににおいて、判定がなされ、良い麦は選り分けられてメシアの王国に入る。しかし、毒麦は除かれる。
 - ④ 真の種まきか、偽の種まきかは、最終的には穂をつけて良い実を結んだか、そうでないかによって明らかとなる。
- (3) イエスによる解説（マタイ 13：36～43）にも、4つのポイントがある。
 - ① 真の種まきをするのは、人の子＝メシアである。
 - ② 畑は、この世界である。そして良い種は、御国の子たちである。御国の子たちとは、信者のことであるが、彼らは真理を携えて全世界に出て行く。使徒の働きに記録されているとおりである。
 - ③ 敵は、悪魔、サタンである。そして毒麦は、悪魔の子たち、すなわち不信者である。悪魔は、世界中にそのような人々を蔓延させる。畑とは「世界」であり、教会に限らないが、しばしば彼らは信者であるかのように、ふるまう。
 - ④ 刈り取りをする者たちは、天使たちである。この世の終わりの収穫の時とは、奥義としての神の国の時代の終了点、すなわち諸国民の裁きである。
 - この裁きについては、イエスは、このあと、マタイ 13：47～50「地引網のたとえ話」にて、弟子たちにも語る。さらに、預言として、マタイ 25：31～46「諸国民（異邦人）の裁きの預言」において語る。
- (4) からし種のたとえ話・・・外面的には大成功して見事な成長をしていくかのように見えたが、そこには、鳥が来て巣を作る。すなわち、悪魔とその配下の悪霊たちによる偽の宣教活動の方が優勢になる。
- (5) パン種のたとえ話・・・パン種は罪、特に教理的な誤った教えを象徴する。奥義としての神の国は、大きく膨らむが、その内面には罪の腐敗、教理的な過ちが含まれている。

弟子たちだけに語られた 4 つのたとえ話

1. 隠された宝のたとえ話（マタイ 13：44）

天の御国は畑に隠された宝のようなものです。

その宝を見つけた人は、それをそのまま隠しておきます。そして喜びのあまり、行って、持っている物すべてを売り払い、その畑を買います。

(1) 「宝」は、旧約聖書ではイスラエル民族を象徴する（出 19：5、申 14：2、詩 135：4）

- 出 19：5～6 今、もしあなたがたが確かにわたしの声に従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはあらゆる民族の中にあつて、**わたしの宝**となる。全世界はわたしのものであるから。あなたがたは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。
- 申 14：2 あなたは、あなたの神、主の聖なる民だからである。主は、地の面のあらゆる民の中からあなたを選んで、**ご自分の宝の民**とされた。
- 詩 135：4 主は、ヤコブをご自分のために選び、イスラエルを **ご自分の宝**として選ばれた。

(2) イスラエルの大部分はメシアを拒否したが、神はイスラエルに少数の信仰者を残しておられる。彼らは、**レムナント、イスラエルの残れる者**である（ロマ 11：5）。

ロマ 11：2～5

神は、前から知っていたご自分の民を退けられたのではありません。

それとも、聖書がエリヤの箇所で言っていることを、あなたがたは知らないのですか。エリヤはイスラエルを神に訴えています。「主よ。彼らはあなたの預言者たちを殺し、あなたの祭壇を壊しました。ただ私だけが残りましたが、彼らは私のいのちを狙っています。」

しかし、神が彼に告げられたことは何だったのでしょうか。「わたしは、わたし自身のために、男子七千人を残している。これらの者は、バアルに膝をかがめなかった者たちである。」

ですから、同じように今この時にも、恵みの選びによって**残された者たち**がいます。

(3) よって、このたとえ話で「宝」とは、「奥義としての神の国の時代におけるレムナントである、ユダヤ人信者」を指す。彼らは、ガラテヤ 6：16 では「神のイスラエル」と呼ばれる。

2. 高価な真珠のたとえ話（マタイ 13：45～46）

天の御国はまた、良い真珠を探している商人のようなものです。

高価な真珠を一つ見つけた商人は、行って、持っていた物すべてを売り払い、それを買います。

- (1) 旧約聖書では「真珠」が象徴するものは特にない。教会がユダヤ人信者と異邦人信者とから成ること、6 番目のたとえ話がユダヤ人信者のことであることを考えると、真珠は異邦人信者を指すと推測される。
- (2) 真珠は海から採られる。「海」は、異邦人世界を象徴する（ダニ 7：2～3、黙 17：1、15）
- (3) 46 節の真珠は 1 個である。真珠が貝の中で徐々に形成されるように、異邦人信者の数も徐々に増えていく。そしてその数が満ちたとき（ロマ 11：25）、教会は完成し、教会は携挙される。

3. 地引網のたとえ話（マタイ 13：47～50）

また、天の御国は、海に投げ入れてあらゆる種類の魚を集める網のようなものです。

網がいっぱいになると、人々はそれを岸に引き上げ、座って、良いものは入れ物に入れ、悪いものは外に投げ捨てます。

この世の終わりにもそのようになります。御使いたちが来て、正しいものたちの中から悪い者どもをより分け、火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ぎしりするのです。

- (1) 「海」は異邦人世界を象徴する。
- (2) 奥義としての神の国は、異邦人の裁きをもって終了する。
- (3) 異邦人の裁きは、大患難期が終了後、メシアの王国が始まるまでの 75 日間の時期に起きる出来事のひとつである。それに関する預言は、マタイ 25：31～46「諸国民の裁き」。

4. 家の主人のたとえ話（マタイ 13：51～52）

あなたがたは、これらのことがみな分かりましたか。」彼らは「はい」と答えた。

そこでイエスは言われた。「こういうわけで、天の御国の弟子となった学者はみな、自分の倉から新しい物と古い物を取り出す、一家の主人のようです。」

- (1) 「新しい物」とは、奥義としての神の国。新約聖書で初めて啓示された。
- (2) 「古い物」とは、神の国のほかの 4 つの層。旧約聖書でも知られていた。
- (3) 神の国の弟子となった学者はみな、神の国の 5 つの層を理解する。それは、一家の主人が、自分の倉から新しい物も古い物も自由に持ち出してそれぞれ正しく用いることができるようなものである。
- (4) 使徒パウロの宣教において、主要なテーマは「神の国」（使徒 19：8、20：25、28：23、31）であった。その「神の国」とは、メシアの王国だけではなく、神の国のプログラム全体であり、特に「奥義としての神の国」についてであった。パウロは、神の奥義の管理者であったからである（I コリ 2：1、4：1）。